

# 話し言葉における助数詞の選択に関する一考察 — 〈枚〉〈本〉〈つ〉〈個〉に注目して—

山本晃子（立命館大学大学院生）

## 1. はじめに

日本語の助数詞について、その用例を新聞から収集し分析した飯田（1999）によると、新聞では約 360 種もの助数詞が使用されているという。しかし、三保（2006）で「日常会話では、「携帯電話」も「牛乳パック」も「ひとつ・ふたつ」で済ませることもある。」（p.7）と述べられるように、助数詞の使い分けは義務的なものではない。そして、特に日常会話のようなインフォーマルな場面では対象名詞の範囲の広い〈つ〉のような助数詞が多く使用されると考えられる。以下、本発表では「携帯電話一つ」、「牛乳パック二つ」のように、助数詞を用いて表された数量と対応する「携帯電話」「牛乳パック」のような語を「対象名詞」と呼ぶ。

〈つ〉は、日本語の助数詞のうち対象名詞の範囲が最も広く、無生物であれば基本的に何にでも使用することができる（松本 1991, 飯田 1999, 眞野 2004 等）。そのため、前述の「携帯電話」や「牛乳パック」のように他の助数詞を使用可能なものにも、〈つ〉を用いることができる。一方〈個〉は、〈枚〉〈本〉〈粒〉のような助数詞と同様に、対象名詞の形状によって使用が規定される助数詞で、典型的には「持ち運び可能な三次元的なもの」に使用されることが指摘されている（松本 1991, 飯田 1999, 谷原・顔・リー等）。しかし、Shimojo（1997）、伊藤（2015）は、話し言葉では〈つ〉と同様に〈個〉も、形状を持たない抽象的なものを含む広い範囲に使用され、他の助数詞を使用可能なものにも用いられることが明らかにされている。

本発表では、他の助数詞を使用可能な対象名詞に〈つ〉あるいは〈個〉が用いられる場合、助数詞の選択にどのような要因が関わるのか、『日本語日常日常会話コーパス』（以下、CEJC）から収集した例を対象に分析を行った。分析は、対象名詞の形状に使用が規定される助数詞のうち、CEJC 内で使用頻度の高い〈枚〉〈本〉について、これらの助数詞を使用可能なものが〈つ〉〈個〉を用いて数えられている例に注目し行った<sup>1</sup>。

## 2. 研究方法

本研究では、CEJC を対象に、オンライン検索ツール『中納言』を利用し〈枚〉〈本〉〈つ〉〈個〉の用例収集を行った<sup>2</sup>。〈つ〉の用例の検索条件を(1)に示す。

- (1) キー: 品詞 LIKE "名詞-数詞%" AND 後方共起: 語彙素="つ" ON 1 WORDS  
FROM  
キー WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND  
limitToSelfSentence="1" AND tglWords="20"  
AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

<sup>1</sup> 松本(1991)では対象名詞の形状に使用が規定される助数詞を「形状類別詞」と呼び、日本語の形状類別詞は〈個〉〈枚〉〈本〉〈粒〉〈筋〉〈面〉の 6 つとしている。CEJC では〈個〉 1094 例、〈枚〉 457 例、〈本〉 452 例、〈粒〉 9 例、〈筋〉 4 例、〈面〉 5 例が見られた。

<sup>2</sup> 『中納言』のバージョンは 2.7.2, CEJC のデータバージョンは 2023.03 である。

まず、収集した用例について、前後文脈や CEJC に収録されている映像を用いて対象名詞の確認を行った。そのうち、「二枚爪」「一本釣り」のように助数詞が複合語の一部になっているもの、歌詞や本からの引用、対象名詞が判断できない例は、分析の対象外とした<sup>3</sup>。これらの例を除き、〈枚〉443 例、〈本〉416 例、〈つ〉1423 例、〈個〉1066 例を対象に分析を行う。以降、3 節では、〈枚〉の対象名詞の特徴を確認し、〈枚〉が使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉が使用される場合、助数詞の選択にどのような要因が関わるのか、共起する数詞と、対象名詞の形状の観点から分析を行う。4 節では、3 節と同様の分析を〈本〉について行う。5 節で、これらの分析結果をまとめる。

### 3 〈枚〉について

#### 3.1 〈枚〉の対象名詞の特徴

〈枚〉443 例の異なり語数は 113 語であった。その上位 20 語を表 2 に示す<sup>4</sup>。

順位	対象名詞	用例数	順位	対象名詞	用例数
1	カード	39	11	習字	9
2	チケット	34	12	皿	8
3	写真	33	13	すし	7
4	紙	25	14	年賀状	7
5	布	25	15	さつま揚げ	7
6	ブラックガーランド	17	16	ローストビーフ	7
7	Tシャツ	15	17	ページ	5
8	板	12	18	資料	5
9	座布団	11	19	十円玉	5
10	用紙	9	20	封筒	5

〈枚〉は典型的には「二次元的（平面的）な広がりが目立つもの」に使用されることが指摘されている（松本 1991, 谷原・顔・リー1990, 飯田 1999 等）。表 2 から

も〈枚〉がカード、写真、布のように、二次元的、平面的で厚みの目立たないものに使用されていることがわかる。しかし、厚みには程度差があり、カード、チケット等の全く厚みのない紙状のものから、板、皿、さつま揚げのような、ある程度厚みのあるものにも〈枚〉が使用されている。〈枚〉の対象名詞の上位には、厚みのない紙状のものが多く見られる。

#### 3.2 〈枚〉を使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉が使用されている例の収集

〈枚〉を使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉が使用されている例を収集するために、以下の作業を行った。まず、〈つ〉〈個〉の用例のうち、〈枚〉の対象名詞に含まれるのと同じ語を対象名詞とする例を取り出した。そのような例として、「座布団」「写真」「皿」等が挙げら

<sup>3</sup> 対象名詞が判断できない例とは、発話からも前後文脈からも対象名詞が判断できなかった例、あるいは、発話現場にある何らかの対象に言及しているが、CEJC に収録された映像にその対象が映っていないために対象名詞が判断できなかった例を指す。

れる。次に、〈つ〉〈個〉の用例のうち、CEJCでは〈枚〉の使用が見られなかった対象名詞でも、〈枚〉を使用可能であると考えられる例を取り出した。そのような例として、「ハンカチ」、「枕カバー」等が挙げられる。最後に、前述の方法で取り出した例のうち、対象名詞が同じであっても、〈枚〉を使用する場合と、〈つ〉または〈個〉を使用する場合で、対象名詞が表すものが異なる例を確認した。たとえば、(2a)から(2c)の対象名詞はすべて「原稿」であるが、〈枚〉を使用する場合には原稿用紙の数(枚数)を表し、〈つ〉〈個〉を使用する場合には原稿自体の数を表している。

- (2) a. こうすると 一枚一枚で プレビューの なんか 原稿みたいなるよ (K007\_015,7080)  
 b. 同じ話題を二つの原稿に書いてしまったか ちょっと確認 (T016\_008,40940)  
 c. 一個ずつで (原稿が) 完結してる感じじゃない (T016\_003,72160)

また、〈個〉に関しては、〈枚〉を使用する場合と〈個〉を使用する場合とで、表すものの形状が異なる例が多く見られた。例えば(3a)(3b)は、ボードゲーム中のシーンであるが、(3a)の〈枚〉は、ゲーム中で「レンガ」の役割を持つカードを示し、(3b)の〈個〉は、ボード上で動かす駒を示している<sup>5</sup>。

- (3) a. これはレンガが二枚に付き 二枚捨てて好きなカード一枚取れるって  
 ゆうところが (K013\_020,71660)  
 b. でもさ レンガ一個しかないもん (K013\_020,68990)

このような例を除き、〈枚〉を使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉が使用されている例として〈つ〉49例(異なり語数23語)、〈個〉70例(異なり語数21語)が収集された。

### 3.3 〈枚〉を使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉が使用されている例の特徴

表3に〈枚〉〈つ〉〈個〉の異なり語数と用例数を示す。助数詞ごとに比較すると、異なり語数、用例数ともに〈枚〉の使用が圧倒的に多い。そのため、日常会話でも〈枚〉を使用可能なものに〈つ〉〈個〉が使用される頻度はそれほど高くなく、対象名詞の範囲もそれほど広くないことがわかる。

助数詞	異なり語数	用例数
枚	113	443
つ	23	49
個	21	70

次に、それぞれの助数詞ごとに共起する数詞とその割合を表4に示す。表中の「その他」には十以上の数と共起する例、「不定の数」には「いく」「何」と共起する例が分類される。

<sup>4</sup> 表2中のフラックガーランドは三角形の飾り布で、壁やテントの周りにつるして使用される。

<sup>5</sup> 同様の例として、「貝」(〈枚〉は貝殻、〈個〉は貝そのもの)、「メニュー」(〈枚〉はラミネート加工された一枚もののメニュー、〈個〉は冊子体のメニュー)、「フラックガーランド」(〈枚〉

表4：〈枚〉 〈つ〉 〈個〉 数詞との共起

数詞	〈枚〉		〈つ〉		〈個〉	
	数	割合	数	割合	数	割合
一	168	36.8%	17	34.7%	48	68.6%
二	110	24.1%	13	26.5%	9	12.9%
三	29	6.3%	9	18.4%	5	7.1%
四	26	5.7%	2	4.1%	2	2.9%
五	13	2.8%	0	0.0%	1	1.4%
六	3	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
七	1	0.2%	1	2.0%	0	0.0%
八	9	2.0%	0	0.0%	0	0.0%
九	9	2.0%	0	0.0%	1	1.4%
その他	55	12.0%	0	0.0%	3	4.3%
不定の数	34	7.4%	7	14.3%	1	1.4%
総計	457	100.0%	49	100.0%	70	100.0%

〈枚〉は、比較的満遍なく様々な数詞と共起し、十以上の数詞との共起も見られる。一方、〈つ〉 〈個〉は共起する数詞に偏りがあることがわかる。〈つ〉は、一から三との共起にほぼ限られている。また、〈個〉は、一との共起が約7割を占めている。このことから、助数詞の選択には、共起する数詞が要因として関わることが示唆される。

次に、形状的特徴から〈つ〉 〈個〉の対象名詞を確認する。表5、表6に〈つ〉 〈個〉の対象名詞のうち、上位10語を示す。

表5：〈枚〉 → 〈つ〉 対象名詞上位10語

順位	対象名詞	用例数
1	皿	9
2	資料	6
3	座布団	4
4	パンフレット	4
5	チョコレート	3
6	写真	2
7	ラップ	2
8	封筒	2
9	羽（風力発電）	2
10	フラックガーランド	2

表6：〈枚〉 → 〈個〉 対象名詞上位10語

順位	対象名詞	用例数
1	皿	19
2	ハム	9
3	チョコレート	8
4	肉	5
5	さつま揚げ	4
6	CD	4
7	シート	3
8	ラップ	2
9	シール	2
10	座布団	2

〈枚〉と比較すると、〈つ〉 〈個〉ともに上位の対象名詞には厚みのない紙状のものが少ない。その特徴は、特に〈個〉に顕著である。厚みが増すほど、そのものの形状は〈枚〉の典型を離れ、また、形状的に〈個〉の範疇に近づいていくことになる。対象名詞の形状が〈枚〉の典型からどれだけ離れているかという点も、〈つ〉 〈個〉の選択の要因として考えられる<sup>6</sup>。

は布一枚の状態、〈個〉は五枚で一組になった状態）等に見られた。

<sup>6</sup> 対象名詞の厚みが増すことで〈個〉が用いられやすくなることの指摘は、Shimojo(1997)、飯田

#### 4 〈本〉について

##### 4.1 〈本〉の対象名詞の特徴

〈本〉416例の異なり語数は137語であった。その上位20語を表7に示す。

順位	対象名詞	用例数	順位	対象名詞	用例数
1	糸	30	11	指	8
2	恵方巻	17	12	電車	8
3	ワイン	14	13	ボールペン	7
4	足	13	14	マイク	7
5	バス	12	15	たこ糸	6
6	ビール	12	16	パウンドケーキ	6
7	ねじ	9	17	ヒット	6
8	映像	9	18	鉛筆	6
9	焼き鳥	9	19	線	6
10	ウィンナー	8	20	ジュース	5

多くの先行研究で指摘されているように、〈本〉は典型的には「一次元的な細長いもの」に用いられるが、形状をもとに拡張した用法も多く見られる (Lacoff1987, 松本1991, 飯田1999等)。

そのようなものとして、ヒット等の野球用語、交通手段、映像・映画等の作品、撮影や仕事のような活動等の例が挙げられる。表7からも、〈本〉が糸や恵方巻のような一次元的な細長い形状を持つものから、具体的な形状を持たない映像、野球のヒット、交通手段 (バス、電車) のようなものにまで広く使用されていることがわかる<sup>7</sup>。

##### 4.2 〈本〉を使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉が使用されている例の収集

収集は、〈枚〉と同様の方法で行った。まず、〈つ〉〈個〉の用例のうち、〈本〉の対象名詞に含まれるのと同じ語を対象名詞とする例を取り出した。そのような例として、「ねじ」「ボールペン」「ウィンナー」等が見られた。次に、〈つ〉〈個〉の用例のうち、CEJCでは〈本〉の使用が見られなかったが、〈本〉を使用可能であると考えられる例を取り出した。そのような例として「スプーン」「懐中電灯」等が見られた。最後に、取り出した例のうち〈本〉を使用する場合と、〈つ〉または〈個〉を使用する場合で、対象名詞が表すものが異なる例を確認した。そのような例として、(4a)から(4c)が挙げられる。ここでは同じ「つくね」でも、〈本〉では串にささった状態のものを、〈つ〉では注文数を、〈個〉では串にささずに皿に乗せられた状態のものを表している<sup>8</sup>。

(1999)にも見られる。また、〈枚〉が使用可能な対象で厚みのあるものの多くに、〈個〉も使用可能であることが飯田(1999)でも指摘されている。

<sup>7</sup> 交通手段に〈本〉が用いられていた例を(i)に示す。

(i) 二風谷のほうに向けてバスが一本あんの (K005\_003,50910)

<sup>8</sup> 同様の例として、「うどん」(〈本〉は麺の本数、〈つ〉〈個〉は一玉のうどん) や、植物が対象名詞である場合に、〈本〉ではその植物自体の本数を表し、〈つ〉〈個〉ではその植物が束になった状態を表すものが見られた。

- (4) a. つくね二本ですよね (T024\_010,42860)  
 b. つくね三つ頼んで (T016\_008,40940)  
 c. (つくね)一皿三個入りだよ (W006\_001,29270)

このような例を除き、〈本〉を使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉が使用されている例として〈つ〉39例(異なり語数23語)、〈個〉48例(異なり語数28例)が収集された。

#### 4.3 〈本〉を使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉が使用されている例の特徴

表7に〈本〉〈つ〉〈個〉の用例数と異なり語数を示す。〈つ〉〈個〉と比較して、用例数、異なり語数ともに〈本〉の使用が圧倒的に多い。そのため、〈枚〉と同様に、日常会話でも、〈本〉を使用可能なものに〈つ〉〈個〉が使用される頻度はそれほど高くなく、対象名詞の範囲もそれほど広くないと言える。

助数詞	異なり語数	用例数
本	137	416
つ	23	39
個	28	48

次に、共起する数詞とその割合を表8に示す。ここでも、助数詞によって数詞に偏りが見られる。〈本〉は比較的満遍なく様々な数詞と共起し、十以上の数詞との共起も見られる。一方で〈つ〉は、不定の数以外には、一から五までの共起しか見られず、その中では一、二と共起する例が6割以上を占める。〈個〉は、一との共起が約7割を占め、残りのうち約2割が二と共起する例となっている。ここでも助数詞の選択には、共起する数詞が関わることが示唆された。

数詞	〈本〉		〈つ〉		〈個〉	
	数	割合	数	割合	数	割合
一	195	46.9%	11	28.2%	35	72.9%
二	66	15.9%	15	38.5%	11	22.9%
三	35	8.4%	3	7.7%	0	0.0%
四	21	5.0%	3	7.7%	0	0.0%
五	10	2.4%	1	2.6%	1	2.1%
六	3	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
七	2	0.5%	0	0.0%	0	0.0%
八	11	2.6%	0	0.0%	0	0.0%
九	3	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
その他	49	11.8%	0	0.0%	1	2.1%
不定の数	21	5.0%	6	15.4%	0	0.0%
総計	416	100.0%	39	100.0%	48	100.0%

次に、形状と用法の点から〈つ〉〈個〉の対象名詞を確認する。表9、表10に〈つ〉〈個〉

の対象名詞のうち、上位 10 語を示す<sup>9</sup>。

順位	対象名詞	用例数
1	コース	5
2	ヘラ	5
3	瓶	3
4	のり巻き	3
5	企画	2
6	映画	2
7	ねじ	2
8	ボトル	2
9	番組	1
10	板	1

順位	対象名詞	用例数
1	ねじ	5
2	民間	4
3	ティースプーン	4
4	歯	3
5	企画	2
6	点滴	2
7	ウィンナー	2
8	ビーカー	2
9	瓶	2
10	老眼鏡	2

〈つ〉〈個〉ともに、一次元的な細長い形状を持つものだけでなく、具体的な形状を持たない対象名詞にも使用が見られる。形状を持つものに注目すると、〈本〉で上位にあった「糸」のような極端に細長く幅のないものには〈つ〉〈個〉の使用が見られなかった。反対に、〈つ〉〈個〉の対象名詞には、ねじや歯のように長さのないもの、ヘラのように先が広がっているもののように、細長さの目立たないものが見られた<sup>10</sup>。細長さが目立たなくなるほど、その形状は〈本〉の典型を離れることになり、そのことが〈つ〉〈個〉の選択に関係していると考えられる。また、形状を持たないもののうち、映画、番組、企画等の対象名詞には〈つ〉〈個〉ともに使用が見られるのに対し、〈本〉で上位にあった交通手段には、〈つ〉〈個〉どちらの使用も見られなかった。また、野球関係の用語は〈つ〉で一例のみ「ヒット」への使用が見られたが、その発話では、〈つ〉の直後に〈本〉での言い直しが見られた<sup>11</sup>。そのため、形状を持たない対象名詞のうち、交通手段と野球関係の用語には〈つ〉〈個〉を使用しにくい可能性がある。このことから、〈本〉を使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉を使用する場合には、形状以外にも対象名詞の用法が要因として関わる可能性が示唆された。

<sup>9</sup> 表 10 中の「民間」を対象名詞とする例を(ii)に示す。これは就職活動中の発話で、話者は聞き手に「民間企業に受かっていること」を伝えている文脈である。

(ii) 民間一個 受かって (K003\_005,4670)

話者は異なるが、同じ会話で「民間」に〈本〉が使用される例も見られた。その例を(iii)に示す。この文脈では、話者は聞き手に「民間企業だけを受けるのではない」ことを伝えている。

(iii) 絶対もう全然もう (民間) 一本じゃなくて (K003\_005,39400)

<sup>10</sup> 先が広がっているものとしては、このほかに「懐中電灯」や「トンカチ」等の例が見られた。

<sup>11</sup> その例を(iv)に示す。

(iv) ヒットもう二つ 二本打ってっから (T004\_001,44490)

## 5 まとめ

本発表の結果から、日常会話のようなインフォーマルな場面であっても、〈本〉〈枚〉が使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉が使用される頻度は高くなく、使用される対象名詞の範囲も限られることがわかった。また、助数詞選択の要因として、「共起する数詞」「対象名詞の形状」「用法」が条件として関わることが示唆された。「共起する数詞」については、〈つ〉は五以下の小さい数詞（特に一、二）と共起する場合に選択されやすく、〈個〉は一と共起する場合に選択されやすいと考えられる。また、「形状」という点では、対象名詞が〈枚〉〈本〉を用いる典型的な形状から離れるほど、〈つ〉〈個〉が使用されやすいと考えられる。さらに、具体的な形状を持たないが〈本〉を使用可能な対象名詞については、用法によって〈つ〉〈個〉の使用に差が見られ、野球関係の用語や交通手段を表す用法には〈つ〉〈個〉を使用しにくい可能性が示された。

本発表では、〈つ〉〈個〉を広い範囲の対象名詞に用いることのできる助数詞として同じように扱い、分析を行った。そのため、両助数詞の特徴や違いについて十分に検討することができなかった。今後はそれぞれの特徴や違いをふまえたうえで、〈つ〉〈個〉が〈枚〉〈本〉を使用可能な対象に用いられる場合、両助数詞にどのような違いが見られるか、詳細な分析を行いたい。また、今回は〈枚〉〈本〉という対象名詞の形状に規定される助数詞の一部を対象とした。それ以外の特徴を持つ助数詞（〈台〉〈軒〉〈歳〉等）に関する分析も、今後の課題としたい。

## 参考文献

- 飯田朝子（1999）「日本語主要助数詞の意味と用法」博士論文，東京大学。
- 伊藤由貴（2015）「近代を中心とした助数詞の通時的研究」博士論文，大阪大学。
- 谷原公男・顔瑞珍・デビー・リー（1990）「助数詞の用法とプロトタイプ—〈面〉・〈枚〉・〈本〉・〈個〉・〈つ〉—」『計量国語学』17-5, pp. 209-226.
- 松本曜（1991）「日本語類別詞の意味構造の体系—原型意味論による分析—」『言語研究』99, pp. 82-106.
- 眞野美穂（2004）「類別詞「個」と「つ」の認知的考察」西光義弘・水口志乃扶（編）『類別詞の対照』pp. 129-148, くろしお出版。
- 三保忠夫（2006）『数え方の日本史』吉川弘文館。
- Lacoff, George (1987) *Woman, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal About the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Shimojo, Mitsuaki (1997) The role of the general category in the maintenance of numeral classifier systems: The case of tsu and ko in Japanese. *Linguistics* 35-4. pp. 705-733.